

フロイディッヒ・フリューゲル Freudig.Flügel

24年
4月号

2012年4月13日
編集・発行／大正会館内
大正フロイデ：西風 勝

2月19日

千島体育館に最後の「第九」が響く



エウフォニカさん よろしく

この度は第六回定期演奏会、ご成功おめでとうございませう。
関係者各位に、心より御礼申し上げます。
この六年間の集大成といえる好演であったと思えます。又、直接お客様からも多くの喜びの声が届いている事をご報告いたします。
私は、「第九」を指揮し毎回多くのことを学ばせて頂きます。
ベートーヴェンは聴力を失った状態でも、不屈の精神でこの作品を完成させました。
この交響曲が、私達現代人にどれほど勇気と希望を

多くのことを

学ばせて頂く「第九」

指揮者 高谷 光信



さあ大きな口を開けて！

与えているのかと思うと、その存在の大きさは他のどの作品とも比べようがありません。
ドイツ人俘虜から授かった「第九」の種は、日本人の心の中で大きな樹となりつつあります。
完璧な演奏になることを願いつつも、達成される事はありません。
「生きる事に感謝し、前向きであれ」とベートーヴェンが語っているように感じます。
また来年お会い出来ることを楽しみにしております。ありがとうございます。

暗譜がすべての基本

大正フロイデ副団長 深谷 巖



平成二十四年二月十九日、第六回大正区第九定期演奏会が終了しました。

第一部はエウフォニカ管弦楽団を中心に区内中学・高校のブラスバンドが合同で、一曲目が「アフリカン・シンフォニー」二曲目が大正区第九合唱団や一緒に参加した子ども達も加わって「サウンド・オブ・ミュージック」のメドレーが歌い上げられました。

第二部のベートーヴェン交響曲第九番は過去五回の経験により、成長した歌声で千島体育館の観客に大きな感動を与え、合唱団にも強い達成感を与えました。

ここで六年間を振り返り、これからの大正フロイデを考えてみたいと思います。第一は、経験を経るにしたがい暗譜で歌える様になった事です。

練習で他のパートと合わせる時、つられて音程やリズムが狂ってしまします。その時には楽譜に気を取られて発声練習でした事や指揮者を注視する事など到底出来ません。

角地先生が一曲覚えるのに五〇〇回歌う必要があるといわれましたが、私の様

に年をとると、七〇〇回練習しなければならぬ。一曲マスターする期間が一〇〇日とすれば一日七回練習しなければならぬことになりましたね。

その結果、他パートを聴ける様になると、ハーモニイを感じる事が出来、つくづく暗譜が基本であると思えました。

他の声を聴き、それに合わせる、互いが聴きあって純粋な和音を求めて協力しあう。

協調と調和がもし出ずハーモニイが感動を生み、声合わせの楽しさが合唱の醍醐味だと思います。



2/18 前日リハーサル